

雪 椿 通 信

新潟県立近代美術館だより
Spring & Summer 2018



vol.50

館 長 所 感

館 長 木 村 哲 郎

新潟県立近代美術館は今年、満25歳になります。平成5(1993)年7月に、前身の新潟県美術博物館(新潟市)からバトンを受け継ぎ、現在の近代美術館として開館しました。新潟県の美術館ですから、館のコンセプトは本県ゆかりの作家を中心とする「新潟の美術」、大光コレクションがベースとなった明治以降の美術の流れを展望する「日本の美術」、そして初代前川誠郎館長の時代からはじまる「世界の美術」の三大方針の下、美術品収集に力を入れてきました。

日本画では小林古径、土田麦僊、横山操、三輪髯勢ら、洋画では長岡出身の小山正太郎、牧野虎雄、阿部展也ら、彫刻では北村四海・正信親子、千野茂、そして工芸では本間琢斎、佐々木象堂、宮田藍堂、そのほか書の會津八一、デザインの亀倉雄策、版画の星襄一、写真の岡田紅陽、渡辺義雄、濱谷浩ら。いずれも各界を代表する著名な作家ばかりです。その後も浅井忠、青木繁、藤島武二、岸田劉生、萬鐵五郎、佐伯祐三、このほか戦後のパイオニア的存在の斎藤義重、山口長男らを加え、近代日本洋画史をほぼ概観できる作家群を揃えた上に、東山魁夷、横山大観ら日本画の名作も収蔵することになります。



北村四海《女性立像》1926年 当館蔵

海外作品についても、日本の近現代洋画に影響を与えた作家を中心に収集が進められました。小山正太郎の師フォンタ

ネージ、テオドール・ルソーやデュプレ、ドービニーらバルビゾン派の作品などが収蔵リストに加えられました。収蔵品は開館当時の4千点から現在は6千点余に増えました。昨年春、館長に就任して近代美術館が収蔵美術品の内容・点数両面からみて、国内有数の美術館であることを知りました。

当館では昨秋から、「萬鐵五郎展」「堀口大學展」、そして現在は「ディズニー・アート展」を開催しています。こうした展覧会は「企画展」と呼んでいます。企画展と併設して、素晴らしい収蔵品を衣替えしながら常設で展示する「コレクション展」があります。これは年中鑑賞していただけます。

時折、このコレクション展を鑑賞せずにお帰りになるお客様がいますが、もったいないな、と思ってしまいます。逆に「企画展もよかったけど、コレクション展、良かったよ」と声をかけてくれるお客様もおられます。近代美術館ではこうした名作・名品を県民の皆さんから鑑賞していただけるよう、日々研究を重ねています。美術館は県民の皆様の大きな財産です。「芸術、文化が活発な地域は、元気があふれている」と言われます。いっぽう美術館を元気にする一番の良薬は、皆様が足を運んでくださることです。大いにご活用いただきますよう、心からお願い致します。



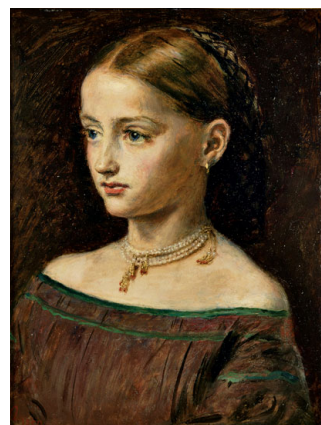
岸田劉生《冬枯れの道路(原宿附近写生)》1916年 当館蔵

しばらくお別れです!

「近代美術館の名品」

新潟県立近代美術館の「名品」といったら、どんな作品が思い浮かびますか? ジョン・エヴァレット・ミレイの《アリス・ 그레이の肖像》やロダンの《考える人》でしょうか。それとも横山操の《炎炎桜島》や土田麦僊の《芥子》でしょうか。あるいは岸田劉生、藤田嗣治...? 当館では、3室あるコレクション展示室の一室で、いつでも当館のとおっておきを見ることができるよう、「近代美術館の名品」のテーマを設け、ご紹介してきました。今回、休館前最後のコレクション展(第2期:5月24日(木)~7月1日(日))では、名品の部屋を二つに増やし、《日本編》と《海外編》に分けてご紹介いたします。

(学芸課長代理 宮下東子)



ジョン・エヴァレット・ミレイ
《アリス・グレイの肖像》1859年 当館蔵



土田麦僊《芥子》1926年 当館蔵
※出品しません

「白寿 江口草玄のすべて」の開催に向けて

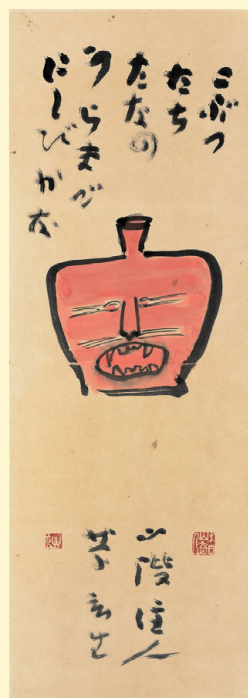
会期

5月26日(土)～7月1日(日)

柏崎の江口草玄と佐渡の中村木子は、戦後、墨人会を結成して書の革新を進め、国内だけでなく、国外とも関わりを持ち、戦後の日本の書の歴史に名を刻んでいる二人です。しかし、書人の調査研究というのは、新潟県内だと良寛や会津八一なら進んでいますが、まして戦後、現代の人となれば全く手つかずというところなんです。しかし、このまま埋もらせておくわけにはいきません。その二人を語るべき情報の収集、そして作品の収集を積み、記録を後世に伝えなければなりません。それで今日まで、ほぼ四半世紀調査研究を進めてきました。早くに平成8年(1996)「戦後の書・その変相 江口草玄」として、戦後の書と美術との関連に焦点を

当てて紹介しました。その時は残念ながら木子については、早く昭和48年(1973)4月に亡くなっていることから調査がなかなか進まず、後を待つことにして、御健在の草玄氏をメインにして時代の諸相を御覧いただきました。

草玄氏は99歳になられる本年も幸いに御健在で、先の展覧会以降、京都で開かれるサークル展には、毎回足を運んで新作を拝見し、また、ことある毎にお話を伺ってきました。並行して、懸案の木子の調査も細い糸を手繰りながらも続け、何とか発表できるまでに進み、一昨年、美術館の研究紀要にまとめることが出来ました。そして本年、先の展覧会からも22年経ち、草玄氏もいよいよ一世紀を過ぎることになり、戦後の書を語る生き証人として本展を開催する運びとなりました。そのため、

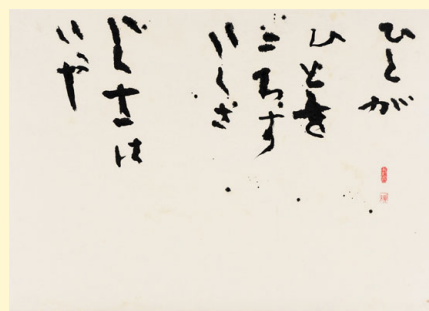


江口草玄《柏崎ふるさとまつり行灯》
2009年 個人蔵

この一世紀の足跡を辿って、残っている手紙を読み、戦前の『健筆』や『書勢』等の競書雑誌、戦後関係した『書之美』『墨美』『墨人』『ひびき』などの書道雑誌、また実見したことのなかった『碧樹

(蒼穹)』等あらゆる資料等々をひっくり返し、膨大な資料を調査した上で一歩でも草玄氏の一世紀の歩みに近づきたいと願って本展は構成しています。今まで語られてこなかった部分や、書の革新に身を挺する一方、野の草花を描いたスケッチなど、これまで知られていなかった側面まで、郷里への深い愛が窺われる「白寿 江口草玄のすべて」を御覧いただけるよう、只今、鋭意尽力中です。

(専門学芸員 松矢国憲)



江口草玄《人が人を殺す戦、戦はいや》2013年 個人蔵



コレクション展「書か?絵か?」(2016年)会場写真(右:中村木子、左:江口草玄)

堀口大學展 その後

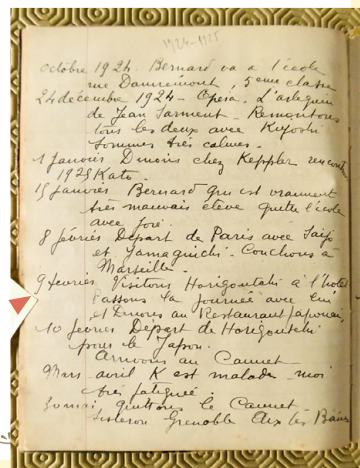
今年の1月に展覧会が閉幕した後、静かな反響がこだまのように

訪れています。堀口大學の親友だった版画家長谷川潔は、27歳で渡仏、フランス人女性と結婚し、89歳で客死しています。長谷川潔夫人のミシュリーヌはとても夫思いの人だったようです。生前彼女がつけていた日記と備忘録には、長谷川潔が会った人や日々の出来事が記録されています。その中に堀口大學の名前も何度か登場することがわかりました。

今回、ご遺族のイヴ・ドードマンさんのご厚意で、その頁を撮った写真をいただくことができたのです。たとえば、1925年の日記には「2月9日 ホテルにホリグチを訪ねる。一日共に過ごし、日本料理店で夕食をとる」(写真の印の箇所)「2月10日 ホリグチが日本に出発」と書かれています。堀口大學が外交官の父

とともに暮らしたルーマニア滞在を終えて、フランス経由で帰国する時に、長谷川潔一家がマルセイユまで見送りに来てくれた際の記述であることがわかります。しっかりと美しい筆跡を読むと、夫とその友人を見つめるミシュリーヌの眼差しが感じられるようです。堀口大學と長谷川潔はその後も手紙を交わし、生涯友情で結ばれていましたが、実際に会ったのはこの時が最後となりました。夕食の席では何を味わい、どんな言葉を交わしたのでしょうか。

(学芸課長代理 平石昌子)



「亀倉雄策賞」 20年の歩みと デザインの潮流

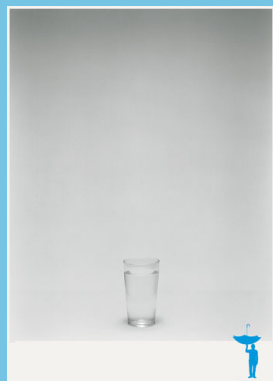
会期
5月24日(木)～7月1日(日)



「亀倉雄策賞」は、1997年に急逝したグラフィック・デザイン界の巨匠、亀倉雄策の遺志を継いで、1999年に創設されました。若いデザイナーたちにも門戸を開くため、作家賞ではなく作品賞として授与されます。とは言うものの、第1回からの受賞者の顔ぶれを見ると、まさに錚々たるデザイナーが名を連ねており、この賞を受賞することでトップ・デザイナーとして認められるといった意味合いがあるように感じられます。

受賞の対象となるのは日本グラフィックデザイナー協会が毎年発行する年鑑『Graphic Design in Japan』に出品された作品に限られますが、幅広い年齢やキャリアを持つデザイナーたちの仕事の中で「最も輝いている作品」となった受賞作を追って見ていくと、この20年のグラフィック・デザインの潮流を知ることができます。

また、受賞作品の半数以上がポスターというオーソドックスな形態である一方で、ここ10年ほどはファッションブランドの一連のグラフィックツールや、展覧会・イベント等の関連制作物の総体として受賞するケースもあり、デザイナーの仕事がますます多様化していることがわかります。



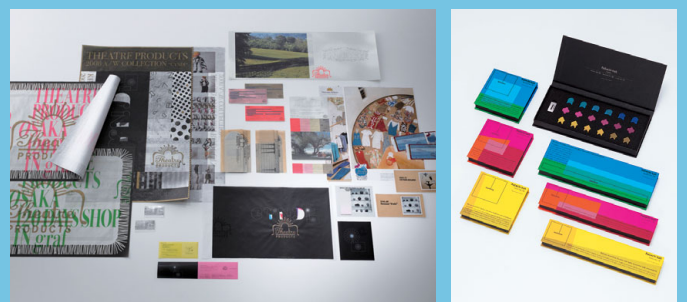
佐藤卓《21_21 DESIGN SIGHT
企画展「water」ポスター》
2007年

当館では、郷土出身のデザイナー・亀倉雄策に関する作品や資料を多数収蔵しており、本賞受賞作品についても第1回から欠かさず収集してきました。しかし前述したように、デザイナーの仕事が広がりを見せる中で、巨大な立体作品や建築の一部であるネオン

サイン、あるいは他館の展覧会の会場デザインといった、美術館のコレクションとしては収集が極めて困難な作品が含まれるようになり、やむを得ずポスター作品のみを収集したというケースもあります。

今回のコレクション展「亀倉雄策賞 1999ー2017」では、日本を代表するデザイナーたちの作品によって、このように多様化し、進化し続けるデザインの歩みの一端をご覧いただきたいと思います。

(主任学芸員 濱田真由美)



左上：植原亮輔《ファッションブランド「THEATRE PRODUCTS」グラフィックツール》2007-2009年
右上：松永真(薫香「ISSIMBOW "Katashi-koh"」)パッケージデザイン》2006年
下：平野敬子《東京国立近代美術館60周年シンボルマーク》2012年

コラム 学芸員の仕事

1つの展覧会を開催するために、学芸員は企画から作品の調査、出品交渉、印刷物の作成、果てはトラックに同乗しての作品借用まで膨大な仕事をこなす必要があります。故に、展覧会のオープン時には、学芸業務のむしろ8割方が終了しているのです。

だからと言って、展覧会が終了すると、作品を前と同じ状態で返却して、お世話になった方々に礼状を書いて、それでやっと終わり…ではありません。そこから、今回の展覧会でやり残したことをやりたい、とか、借用できなかった作品を展示したい、だけではなく、展覧会を開催したことにより、作品についての新たな情報や資料等が随時、美術館に寄せられて、新たな調査と研究がはじまるのです。つまり「展覧会の終わり」は新たな「展覧会のはじまり」であり、その意味では学芸員の仕事は常に継続しているのです。



本稿が記載されている見開きには「白寿 江口草玄のすべて」、「亀倉雄策賞 1999ー2017」そして「堀口大樹展」について紹介されています。これらの展覧会は、それぞれ当館企画による「戦後の書・その変相 江口草玄」展(1996)、「時代を駆けるデザイン 亀倉雄策賞の作家たち」(2012)、「詩人・堀口大樹と美の世界」(2002)の延長線上に企画されました。「継続は力なり」を実証した展覧会と言えるかもしれません。

(学芸課長 藤田裕彦)

わたしとこの1点

長野県信濃美術館に併設して東山魁夷館が建設されたのが平成2年の春。東山の本物の作品に出会いたくて、その年の夏に訪ねました。真っ青な空に緑の芝生が輝き、水を張ったクリークの向こうに真っ白な壁。それが東山魁夷館でした。作品をゆったりと飾った展示室は、まるで別の世界です。そこだけ時間がゆっくりと流れているような不思議な感覚。とても心地よい空間でした。

さて、当館にも1点だけ東山の作品が収蔵されています。《森の静寂》です。自然をそのまま再現したのではなく、作者の内面を透過し純化された形と色だけが画面に残されています。水面を渡ってくるかすかな風、葉についた小さな水滴が水面にしたる音さえも聞こえてくるようです。この作品を見ているとなぜか心が穏やかになります。画面が水平と垂直で構成されて安定していること、群青色を中心とした寒色の使用を基本としていること、厚く塗り重ねられ重厚感があること…分析的に捉えようとすればたくさんの理由が挙げられます。



東山魁夷《森の静寂》1964年 当館蔵

しかし、本物と対峙している瞬間は、それらは何の意味も持ちません。ただ、心惹かれてしまう。それだけなのです。また「近代美術館の名品」で展示されることでしょう。そのときもまた何も考えず作品と向き合いたと思います。

(元学芸課長代理 宇賀田和雄)

近美のおすすめ

冬の厳しい寒さから解放され、ようやく本格的な春の暖かさを感じられる今日この頃です。

今回わたしが近美のおすすめで紹介するのは1階のDMが置かれたテーブルです。ここでは主に県内のギャラリーで開催される個展やグループ展などのDMが置かれています。

開館前の業務で整理をしていると、自分の知らないギャラリーがまだまだ沢山あることや、かつて大学時代に一緒に学び過ごした友人たちの名前を見つけたりなど、日々の中で様々な発見があり個人的にとっても新鮮でした。

近美を訪れた際には是非こちらのテーブルも眺めていただき、皆様が身近なところからアートとの触れ合いや発見を楽しんでいただけるきっかけとなれば嬉しいです。

(嘱託員 中村有斐)



お世話になってます

シリーズ その12



館内放送用マイク

解説会をはじめとしたイベントのご案内や、閉館時間をお知らせする館内放送を耳にしたことがある方も多いのではないのでしょうか。これらの放送は、すべて嘱託員が券売裏のこのマイクから行っています。わかりやすい放送のコツは、ゆっくりと、文節を区切って話すことだとか。

(美術学芸員 松本奈穂子)

休館のお知らせ

近代美術館は改修工事のため、平成30年7月2日～平成31年8月(予定)の間全面休館いたします。

編集部からのひとこと

新潟県の木である雪椿。ここから付けられた「雪椿通信」の名前には、「新潟から全国への発信」という思いが込められていると、開館当初に発行された創刊号に記されています。創刊号から思いは変わらず、何度かのリニューアルを経て、今号で記念すべき50号を迎えることができました。創刊号からのバックナンバーもすべて当館HPでご覧いただけます。美術館の歴史を、この雪椿通信から振り返ってみるのもおもしろいですよ。

(美術学芸員 松本奈穂子)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第50号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111(代) FAX0258-28-4115
<https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷

株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発行日 2018年5月3日